

## 花王教員フェローシップ「ベトナムのチョウ」体験報告書

■ 報告者：圓谷正広（福島県西白河郡西郷村立小田倉小学校教諭）

□ 調査日：2004年8月16～23日

海外への旅行、さらに一般的な観光地ではないところへの移動と生活ということで不安があったのは確かだった。それは、まず言葉の問題から始まった。英語で書かなければならないということに多くの時間と努力を費やした。普段使っていないのだから、当然であった。また、予防接種にしてもまったくの初めての経験でなにをどのようにすればよいのか検討がつかなかった。さらに航空券も悩んだことの一つであった。期間と折り合いをつけて計画を作るのに苦労した。旅行会社まかせの旅程ではなく、自分の力で選び取っていくことにした。

ここで有効に活用できたのがインターネットだった。必要な手がかりを検索することができた。また、航空券や海外のホテルでさえ予約ができたことには興奮した。これで本当に行けるのだろうか。不安は残っていたが。

家族たちは心配していた。もしかすると異国の地で命を落とすのではないか、という不安をもっていた。ベトナムという国からもつ一般的なイメージとしては当然であった。

この一連の準備期間を通して、実に多くのことを学んだ。問題を解決するための方法を試行錯誤した。ひとつのことを実現させるには、山を一步一步登るような地道な努力が必要だということ、正に総合学習を地でいくようなよい経験になった。

総合学習のねらいは、自ら課題をみつけ、その調べ方を計画し調査しまとめるという一連の問題解決学習の過程を経験させることを重視している。

今回野外調査で学んだトランセクトメソッドの方法は、総合学習になじみにくいところもあるが、環境領域で調査の方法を学んだり、地域の自然を知るための導入や基本活動として取り入れていくことはできる。

その理由として、

- ① 自然についてのデータの蓄積が図られる。
- ② 経年変化による環境の変化を知ることができる。
- ③ この活動から、さらなる活動を広げ深めることができる。
- ④ 学校・地域の知的財産になる。

これらのことから、計画的に組み入れ、定期的に調査を実施してはどうかと考えた。

まず、総合的な学習の時間に位置づけをしておく。環境を調べる学年として、30～40時間をふつう盛り込むが、その中の10時間を共通課題として位置づける。そ

こでトランセクトメソッドを活用して四季を通じての調査を行うようにする。少なくとも3年間継続で実施したい。

その活動の中でチョウを採集したり、同定したり、標本作りをしたりしながら、その他の関連した自然環境についても観察するようにする。

この教員フェローシップは、人生の中でも最もすばらしい体験の一つになった。それは、自分の力で旅行を計画し実現できた体験、強烈な異文化に触れたことでの人生観の変化、そして科学調査に直接関わることができた喜び、これらの貴重な体験が日本に帰って来てからの生活に影響を与えていることは間違いない。

自然環境を守るということは、人々の知恵によるところが大きいと思う。そして、それぞれの国がその対策を模索していることを尊重すると同時に、ちがう国の人々が共通の課題に向かって行動を共にし国境や人種を越えての理解に発展することがいかに大切なことかということ学んだ。

このようなすばらしい国際貢献がすでに始まっていることに感動し、私自身もわずかでもそのお手伝いができたら、と心の底から思うようになった。

今思い返すと夢のような一瞬のできごとのように感じられる。美しいチョウ、出会って交流した人々、ベトナムの豊かな自然や文化、人生の中でこのような出会いの機会を生み出すことができた満足感が体の中でたしかに息づいており、人生を楽しもうというエネルギーの源になっている。このエネルギーを学校教育の現場でも生かしていけるようにしたいと思う。

この教員フェローシップは、民間主体での取り組みというところがすばらしい。全国から応募された中から、平等に選抜されていると実感できる。実は、私達教員はとてもせまい生活圏にいると思う。住んでいる市町村の範囲で交流がほとんどである。それは、組織や自治体などからどうしても制約がかかってきてしまうからだと思う。

年齢だって問題ではないであろう。その目的のために誠実に行きたいと思う人にその機会を提供してくれるNPOの存在は、これからの教育や環境問題、国際理解について考える時の知恵を授けてくれると思われる。まだ一般的にはアースウォッチの存在はそれほど知られていないが先進的な未来的な取り組みであるということを確認している。積極的な広報による啓蒙活動を通して多くの人々に知られるようになれば、この分野からの教育改革推進を押しすすめることができると信じる。